



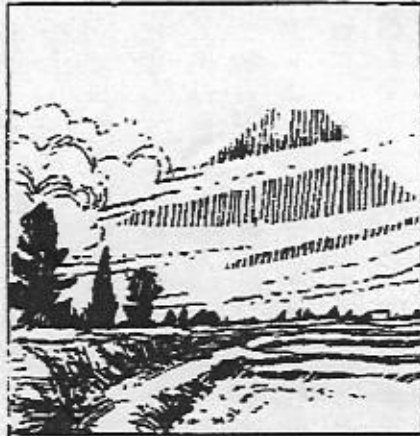
発行日***2010年3月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp

皆様からの投稿をお待ちしております

<http://www.justmystage.com/home/akutagawa/>

一部50円です

畑



あんのく、みやのした、やなばら…などと場所を表わす呼び名が、小さな村の中にもたくさんある。さいのはらもその一つである。「鉄道ぶちの畑の入口にあるうねに植えたあずきのなえが枯れそうになつとるさかい、水をやっといてくれ」と言われ、天秤棒で水のはいった桶をかついで勺でひなびた細い苗に少しずつ水をやりに行った記憶がある。

山陰本線が川にせりだした河岸段丘の畑を分断し先端部が飛び地のように残った為に水路が引けず、夏場や苗が小さい時などには作物が枯れそうになるので水を担いでいかなければならなかったのである。1反ばかりのその畑は小さな山の斜面にあり、周りは杉木立に覆われて線路側だけは手入れされて見晴らしがよかった。

そんな畑であるから土も乾いた黄土でありあまり肥沃でなく、小豆や小麦を植えていた。小麦は種をまき除草を幾度かすれば秋に収穫できたが、あずきはすぐに消えてしまいそうな頼りない苗からだいに育てなければ実がならなかった。私は、乾いて草も生えにくくなった畑のうねを鋤で苗を切らないように気をつけて土を少しずつ掘り返し空気を入れ雑草を削った。この仕事はきわめて単調で、中腰でするために疲れ、手間がかかるのですぐに嫌になった。嫌になると鋤を置いては、線路を見下ろす岸に坐り水筒の茶を飲んで汽車が通るのを待った。山間の単線であるからめったに蒸気機関車は来ないが、たまに客車がくると、どんな人が乗っているのか見ている。

目の前の畑仕事は退屈でつまらなく、ひとつのうねを耕すことさえ終わりのない作業のように思えた。知らない楽しい世界への願望もあってか列車が通るたびに見に行つた。情報が乏しかった時代、日々同じような暮らしのくりかえしで自分の将来を想像することさえできず、鋤で畑の土を掘り返しながら「なんで、こんな仕事をしなあかんのや！ほかにもっとすることがあるにちがいない」こんな自問自答を幾度もつぶやいていた。あの時に比べれば夢のような今の暮らしぶりである。

あんのく、みやのした、やなばら、さいのはら、なつかしい言葉を口ずさむと、あの畑であずきの苗をいじって蒸気機関車を見下ろしていた少年時代を思い出す。

連載 爺捨て山 16

梵店主

八十歳をこえる彼女は「若くして嫁に来て、それ以来きびしい姑に長年にわたつてつかえた後、姑の介護に明け暮れた。主人はその間、他所に女をつくり惚けて家を省みることはなかった。そんな主人も姑が他界してから間もなく病になり、私が家で介護をしなければならなくなった。長患いの主人が昨年やつと亡くなった。白髪になった今の自分を鏡で見て、いったい自分の人生は何だったのだろうか？と思う」と言つた。

昔、近所の嫁さんとその家の婆さんが夕方になると交互に互いのぐちを母に聞いてもらいたくて畑仕事を終る際に来ていたのを思い出した。

女性はこれまで男に比べて過酷な生活を強いられた。賄い婦も兼ねた安価な労働力であり、おまけに子供を産む便利な機械でもあった。男尊女卑の考えが残る女性の言われぬ思いは今も消えない。家庭での面倒なことは全て女達に任せ、男はひたすら逃げて会社人間と言われるように会社ばかりに忠誠をささげてきた。そのつけが、男達の眼前に差し出されているのだが、見ようとしなない。男達は自分たちの悲劇を理解しようとしなない。

我々はいまだ過去にとらわれて生きていく愚かな人間だ。

ヒマラヤへの道 5

梵店主

世界第二の高峰K2はパキスタンに位置し、登山目標としては理想的であったが、よっちゃん達が初めて登る山としては難しすぎた。又、パキスタン政府もいずれの国の山岳会にも登山許可を出しそうになかった。

それで石川先輩が素晴らしいと絵葉書にくれた桃源郷フンザにそびえるラカポシ(7788m)の遠征計画を立てた。ラカポシもパキスタン政府が許可を出さわからなかったが、もしもらえればラッキーである。本当の理由は、別のところにあった。それは、山岳会の賛同を得るための意味合いを含んでいたのであった。

未踏の山が少なくなり、誰もが飛びつくような山はすでになく、新たなルートから登ることで満足しなければならなかったのである。山岳会の上層部ではエベレスト南壁の初登攀ならやってもいいと言ふような意見があったが、ヒマラヤの岩壁をいきなりやる度胸はなかった。過去幾度か国際隊などが試みたが登られていなかった。

ラカポシの北稜は四十五度の傾斜で五千メートル真つ直ぐに伸びている

稜線である。詳しい写真もないが、岩壁よりも登りやすいと思つた。稜線にテントを幾張りも設置して登らなければならぬために、隊員は少なくとも八名は必要であった。

秋の山岳会の総会に、大まかなラカポシ登山計画を出して議題にした。議題にはなったが、大方の先輩は鼻から関心を示さなかった。新たに参加する者もいなかった。この事態を予想は出来たが、よっちゃんは計画変更を余儀なくされたのであった。

K2やラカポシは、海外登山が初めての若手四人だけで登るのは難しいのであきらめる事にした。それで急遽新たな山を探さなくてはならなくなつた。これは難しい事であったが、参加予定で学生の山猿がコーイ・チャンタール峰という山を探してきた。この山はヒマラヤの西の端、ヒンズークシツシュ山城にあつて中国、ソビエト、ア



ヒンズークシツ最大の氷河、チアンタール氷河。山を越えれば、アフガニスタンの秘境ワハンだ。

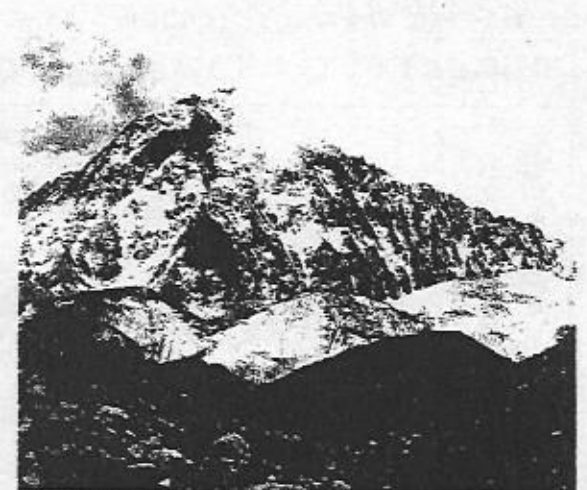
フガニスタン、パキスタンの国境が交差する秘境であった。数十キロ続くチアンタール氷河をキャラバンして登る計画である。この山城の資料はなく人跡未踏の地であると思われた。よっちゃんの山岳会にはパイオニア・スピリットを重視する伝統があつたので、この計画ならば高さは六千メートル台だが山岳会の承認が得られそうに思えた。早速計画づくりを始め大まかな案を作つた。

隊長は四人の中で最年長の村松さんになつてもらい、よっちゃんがマネージャーをすることになった。現役の学生には装備、食料の担当をお願いした。

臨時の山岳会総会を開いてもらい海外登山計画を津田会長の計らいで何とか認めてもらった。会長にはその後大変お世話になるのである。山岳会の承認を得て日本山岳協会へ推薦依頼書を持参して審査後、一ヶ月すれば交付された。その書類一式を山があるパキスタン政府に送る。

パキスタン政府からの返事がないことには動きが取れない。三ヶ月ほど経って返事が来た。その内容は我々の期待する山とは違つていた。希望する山のリストの三番目に書き込んだガラムツシュ峰であつた。六

ようになを押しされていたのであつた。



目指すは、チアンタール氷河の南端にそびえるガラムツシュ

四八八メートルの未踏峰であるからよっちゃんたちにとっては無難な山であるようにも思えた。

よっちゃんは、ようやく夢に描いた海外遠征計画が形になり動き出したので嬉しくて有頂天であつた。住み込みの新聞配達をしながら昼間色々な遠征計画の準備をする。寝る間を惜しんで徹夜しても苦にならなかつた。

問題は金集めである。参加する四名の中で個人負担金が払えそうなのは大手メーカーのエンジニアである村松隊長だけであつた。よっちゃんは現役学生に金のことはまかせろと啖呵を切つて参加を勧めた手前、なんとかせねばならなかつたが、実は皆目あてが無かつたのだ。金づるになる隊長を探して資金の工面をお願いしようと思つていた魂胆が崩れてしまつた。そのうえ山岳会から承認を貰う際に資金集めで山岳会へ迷惑をかけないようになを押しされていたのであつた。

義兄とその家族 (3)

いまはどうか知らないが、昔、若者の間で「スキー場でバイトする」ということが流行った。食事と寝るところを提供してもらい、たまにスキーもさせてもらえる代わりに、バイト代は安い。何で、こんな話を持ち出したかというと、義兄と姉はスキー場で知り合ってから結婚した。姉はバツイチ（子どもなし）、義兄は大学中退。それぞれの家に居づらくて、スキー場にアルバイトに行き、そこで出会い恋に落ちたという、あんまり自慢できるシチュエーションではない。親たちとのすったもんだの末、結婚が決まったとき、私は姉に聞いた。「ねえちゃん、あの人のどこがよかったん？」。姉は即座に「あのな、バイトの部屋にタバコの缶が置いてあって、吸いたかったら横の瓶に一本一〇円（確か）入れることになってん。でも、そのお金を律儀に入れてたんは〇〇（義兄の名前）だけやってん」。

紹介状を主治医に書いてもらおうとしていたときのことだ。前回書いた通り、義兄は結局、粒子線療法を自分から断念したのだが、そう決断する直前の話である。姉も私も、義兄が粒子線療法に行く気になったことが嬉しくて、「袖の下なんかいるのん？」とは言わず、「うん、その方が頼みやすかったら、そうしよ！」と私がATMに走るようになった。ついでに、祝儀袋ではない、さりげない封筒も買って来るように頼まれた。

エレベータを待っていると、姉が病室から追いかけてきて、「〇〇があなたと言うなんて。四国で初めて病院に行ったとき、会社の人がウチの会社の名前を出したら（レントゲンの機械屋なので）早く診てもらえるよと教えてくれはったのに、だまって順番を待っているような人間やのに」と耳元で囁いた。

私はずいぶんだけにしておいた。ここは病院だ。義兄という人質を取られているのに「おかしいよね、セカンドオピニオンは患者の権利ちゃうん！」とは叫べない。でも、内心は腹立たしかった。お金ではない（私のお金ではないし）。病人の義兄に、そういう気をつかわせる医者にハラが立った。もともと患者とその家族の気持ちを組んでくれたっていいじゃないか。



もちろん、医者の方は「袖の下をもらおう」なんて思いもしていなかったと思う。そんなことを患者一家が考えて、コンコンATMに走っているなんて、医者にとつたら「ハア？ なに、考えてんの」ってなもんだらう。だから、義兄の主治医を患者扱いするのは間違っている。それはわかっているし、担当医は少なくとも、自分でこの患者（義兄）を責任をもって診ようという信念をもってくれている（と思う）。「セカンドオピニオン、行きなさい、行きなさい。ついでに、もう帰って来ないでね」とは言っていないのだから。しかも、この患者の家族は、医者の目にも変わり者として写っていたと思う。抗ガン剤や放射線を忌み嫌う姉は無愛想で、礼儀知らずな奥さんだった。泣きながら「先生、主人をよろしくお願いします」と言うべきところでも姉はソツポを向いていた。

義兄が入院してまもなく、細胞を取って調べる、検査のための手術があった。検査のためとはいえ、三時間もかかる、立派な手術だ。そのあとで、執刀医に姉が呼ばれ、私もついて行った。医者は二人。担当医は内科だが、この二人は外科医。取ったばかりの細胞の入った小さな瓶を手に説明をしてくれる。「おそらくガンであると思われる。詳しいことは、病理検査の結果をみないとわかりませんが」「あの、何ガンですか？」「胸腺ガンです」。ここで、姉と私は目を見合わせて、ニンマリ（表情には出していないが、そんな感じ）。「悪性リンパ腫ではないんですね」「違います」「よかったですあ」（声に出していないが、そんな感じ）。私たちが姉妹が気が変だと思われても仕方がない。この検査手術の前に、粒子線療法のことを調べあげていた私たちは「悪性リンパ腫」だと粒子線療法の対象外だが、肺ガンまたは胸腺ガンなら受け入れてもらえると聞いていた。もっとも、姉はもっとタチのよい「胸腺腫」であつてほしいと念じていたので、ガツカリしていなかったわけではないが、一番怖れていたのが悪性リンパ腫だったので、「セーフ！」という心境だった。医者はこの薄情なのか、バカなのかよくわからない患者家族の前に「悪性リンパ腫と同じぐらい胸腺ガンも怖いガンですよ」と言った。泣き崩れないと医者だつて優しくはしてくれないのだ。（A〇）

敷島 旭 (しきしまあきら)

インターネットの百科事典ウィキペディアで、高槻市について調べてみました。さまざまなことが書かれています。中の一つに「方言」という項目があり、その内容に私は興味を覚えました。記述内容は次のようなものです。

「一般的に関西弁であるが、同じ大阪府内の河内弁や泉州弁とは異なり、京都府に隣接するためか穏やかな語感を持つ。中略：近年話されている方言は、70年代ニュータウンとして開拓され急激に人口が増え、また転勤族が多く住む地域でもあるため、標準語に近い大阪弁になっている」

ちよつとしたご縁で、今回、寄稿させて頂くことになりましたが、私は藤井寺市在住です。藤井寺市は、南河内といわれる地域に位置しております。その町の住民である私から見ると、上の記述には少し抵抗感を感じます。高槻市は京都に隣接していて、穏やかな言葉づかいであり、河内弁や泉州弁は、乱暴で品がない……と暗に言われているような感じがするのは気のまわしすぎでしょうか？ でも、強く否定もできないのが正直申し上げてつらいところです。

それから、転勤族が話す標準語に近い大阪弁とは、どんなものでしょうか。だいたいは想像できますが、何か少々変なイントネーションで末尾だけ大阪弁になっている、気味の悪い言葉ではないかと私は思います。これも偏見でしょうか？

転勤族の中には、きつと高槻に住みついた方も少なくないでしょう。転勤で来たまま定年を迎え、子供たちも成人し、今度は彼らが就職して遠いところに行ってしまった、そして自分たちの友人や、同好の趣味を持つ人々との縁で高齢となっても、割合にタフに楽しく生きている場合が多いようです。問題は、男性です。現役時代には物言えば「カイシャ、カイシャ」の会社人間であったばかりに、定年後はほとんど縁者がなく、寂しい日々を無為に生き過ごしてしまふ。ちよつとこれは困った現象です。

先般、NHKのテレビ番組で「無縁社会」というシリーズもののドキュメンタリーが放映されていました。高槻市の方々に叱られるかも知れませんが、『無縁度』は、転勤族が少ない地域より、多い地域の方が高いのではないかと、私は想像しています。

過疎化が進む地方の農村も『無縁度』が極めて高いようですが、都市の中の『無縁』にも、私たちは気を配らなくてはならない時代になりました。『無縁』とならないように、私たち個人としては何をすべきでしょうか？ また、社会全体では、どんな取組みが必要なのでしょう？ 高槻の方言の話から、こんなことが頭に浮かんだ次第です。

田中先輩と私 3

梵店主

自主独立した自由人こそが、田中さんにとって理想の人生であった。金や地位などはどうでもよかったのである。その為には幾つもの職業を変えなければならなかった。

学校をでて船会社に入ったが、すぐにやめてマグロ船に乗り込んだ。遠洋漁業である為に一年近く他の船員達と生活するわけである。この生活を楽しく幾度か聞かされた。サメとのたわむれ話など傑作であった。

船乗りはマグロ船の一度の航海で終わりにして、次は骨董品採取を始めた。田中さんには、同じ山岳部の女子部員の彼女がいたのであった。彼女は、付属高校から英文科に在学していた才媛であった。西陣の帯問屋を営む旧家の

お嬢様であった。

田中さんの祖父は戦前、シンガポールなどに多くの貨物船を所有する船主であった。明治の時代に京都市が財政が逼迫した時に、島津家と田中家が債務を背負ったという記事が残っている話がある。田中さんも幼い時には、平安神宮の南側の一角にあった邸宅に住んでいた。邸には交番があり、大きな庭にはコイが泳いでいたと言う。

田中さんの風貌は人なつっこいイケメンであった。女の人にはもてるだろうと思われたが、田中さん自身はプレイボーイのような生き方を最も嫌っていたので女遊びの話は聞かなかった。

彼女との結婚は少し遅くなったが成婚したためか、田中さんも経済的に安定しなければいけないのではないかと考えたと思うが、普通のサラリーマンにはならなかった。

本が好きで特に民俗学的なものに関心が強く、古本屋さん通いがこつこつと、廃品回収をまねて廃品として出された古本の中から骨董的価値があるのを見つけて出してコレクションしていた。

京都から西宮へ転居してから、家から少し離れたところに倉庫を借りて書齋にした。二階建ての小さな書齋には、田中さんがこれまでコレクションした本屋や世界の古い民芸品がいっぱい、

と並べられていた。

私は、この書齋へは幾度も行つて元氣の出る種やトラのキン玉つけのリカーなど数十種類の漢方などを頂いた。

田中さんは文学部東洋哲学科だったと思うが、哲学的な話はひとつも聞いたことがない。いつも話していたのは男と女の話で民俗学的性行為とでもいうような面白い内容であった。特に未開地域での性行為に関する関心は強くタイの山奥に少数民族を訪ねても生活習慣の中での男と女の関係を聞き出した興味深い話を熱心にしていった。田中さんの視点は大変ユーモラスであった。

私が、古道具屋で「世界性百科全集」全一二巻を買ひ揃え田中さんにプレゼントした事があつた。その時に先輩は大変喜んだ。ヨーロッパの学者には古くからその方面での研究があるが、日本にはあまり無かつたようだ。

文明化した現代社会での性行為を観察し研究する事は難しいが、昔の東南アジアの未開の少数民族における調査では、いろいろ興味深い研究がなされている。インドシナ半島の中央部に通称黄金のトライアングルと呼ばれる地域がある。アヘンの栽培で有名などころである。この地域は多くの少数民族が焼畑や狩猟をしながら原始的な暮らしをしてきた。

「お米を考える」

明石幸次郎

お米は三千年ほど前から作られていたようで、それ以来ずっと食べ続けられて来た日本人にとっては、身近で欠かせない食物の一つであります。消費量で見ると五十年前と比べると、当時は一人当たり百二十kg程であつたものが現在は約半分の六十kg以下にまで減つています。これは、食生活の多様化と畜産物の消費の拡大が原因と言われています。

この傾向は、日本だけでなく、米を主食としている台湾、韓国でも同様で、特に台湾は同じ時期に百六十kg消費していたのが五十kgの三分の一まで減つています。経済が豊かになると外食も増えて、お米を使った伝統的な食べ物以外の食べ物好まれるようになり、それは若い世代ほどその傾向が強くなるので、年々お米の消費が減つて行くと思えます。

食料自給の観点から見るとカロリーベースでは、日本は四十一%と云われ先進国の中で断トツに低いのですが(フランス百二十二%、ドイツ八十四%、イギリス七十%)、生産能力的には、唯一お米だけは、ほぼ100%国内で自給出

来ますが、消費が減り続ける中で、お米の反当りの収量も増えるのと、海外との貿易バランス上、毎年八十万トン位は輸入しなければならぬため、減反を続けなければならない状況にあります。我々中高年の消費者にとっては、お米だけは国内で自給出来ているので、万が一、海外から小麦が入って来なくなつてパンやパスタが食べられなくなつても、メシだけは食べられると、何となく安心して居るところがあります。

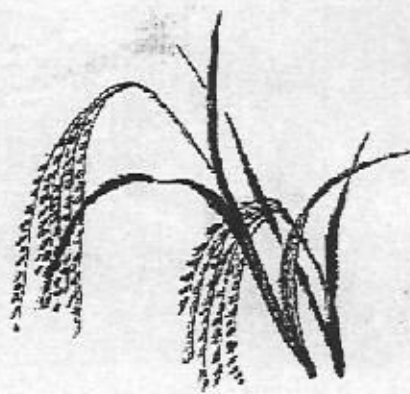
農家にとっては、米作りは安定収入の柱であつたのが、二〇〇四年の規制緩和により、米の扱いが生産者、流通業者も売買が大幅に自由化されると、そこに米価の差別化が生じ、魚沼コシヒカリのようなブランド力があり、美味しいお米は高く売れる半面、普通のお米は安く叩かれる傾向となり、平均

の米価が下がり、多くの農家の収入が安定しない状況が続くようになってしまつていきます。

我家でも、六年前位は五kg二千五百円位のお米を買つていましたが、今は同じくらの品質のものが、スーパーで二千円位で買えますので、二割近くは安くなつていません。消費者は安く買えるので良いかも知れませんが、生産者の農家は大変です。

そこで、新政権の民主党が打ち出したのが、農家へのお米に対する個別所得補償として十アール当り一万五千円の補助金と米価が変動した場合の変動分の補償制度の導入です。大体一アール当り経費を除くと約五万円の収益しか米農家はあがらないと言ふ事ですので(一ha当り五百万円)、この程度の税金からの所得補償はお米の自給を保つ農家の生産意欲向上と、国土自然保全のためからも、国民の反対はないと思ひます。

現在の農業就業人口が一九八〇年に五〇六万人が二〇〇五年には二五二万人半分に減り、反面、就業者平均年齢は六十五歳以上が六十%を超える状況と、農家の収入の不安定からして、これから日本の農業は誰が支えるのか不安感を持ちます。お米を安く食べられる反面、安いだけを喜んでいられないのは、お米以外にもデフレが続く昨今、回り回つてそのしわ寄せが自分たちにも来ると言うことも考えることは、大事なことだと思ひます。



大井直子

二〇一〇年一月八日〜十五日、染色手芸グループが、印度北東部に位置するシッキム王国、ダージリンを訪ねる旅に出た。この旅の中で二つのハイライトを中心に書かせていただこうと思う。

◆日の出に染まるカンチェンジュンガ

四時四十分ホテル出発、五時三十分タイガーヒル展望台到着。まっ暗な空に三日月が冴え、暖かい飲み物を売る人の声があちこちに聞こえる。カイロを貼り、目出し帽を被り、ありったけの防寒具を身につけた一行はひたすら日の出を待つ。展望台では人波が二つに分かれている。一つは東の空に日の出をみようという人たち。一方は反対に、西の空のお目当ての山に向かって立つ人たち。東の空はすでに曙光のきざしに下方がうつつらと染まっている。

今朝は幸運にもよく晴れて山はうつつらと雲上に顔を出している。一瞬、すーっと星が流れる。高度四〇〇〇m、ヒマラヤの山の上の流れ星である。足元がジンジンと冷えて来る。

六時三十分、東方に太陽が昇る瞬間、反対側の山の頂点が一瞬キラリと光り、その一点は小さな三角形を呈し、みるみる広がってピンクの真珠光に山肌を染

め下りる。山全体がピンクに染まるまで十分とかならなかつた。デジカメを夢中で押しつづける。

山全体がすっかり染まり終る頃、ダージリンの街が紫色の朝霧の中に目覚める。ダージリンは霧の街である。その霧が育む虫の一種が茶の葉の裏につき、世界三大茶の一つであるダージリン紅茶の味になるとのこと。

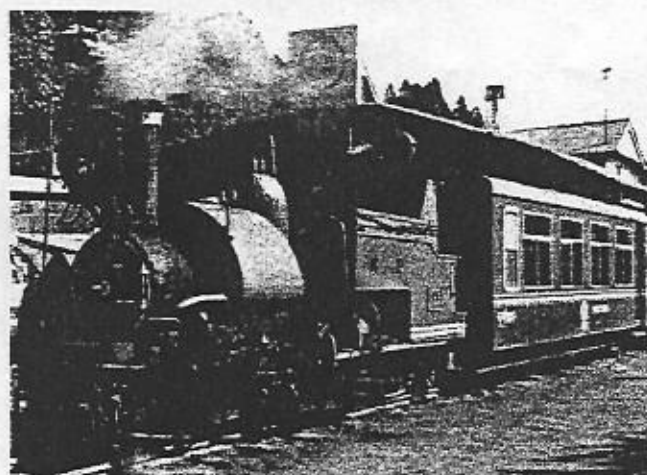
この二〜三十分の天然の大スペクタクルショー。一昨日よりのつらい行程に耐えてやって来た私たちへの最大の賜り物ではなからうか。

体の中を熱い感動が走り抜け、明るくなつた展望台にしばし立ちつくす私たちだった。

◆トイトレイン乗車

ダージリン入りを果たした二日目、いよいよ夢に見たトイトレインに乗車する。専用車でダージリン駅に到着。ストール売りがやって来て、「いらない、いらない」を連発。ラディーナ(いらないの意味)とことわられることから片言で覚えたのだろうか。とすると日本人もかなり来ているのだろうか？

トイトレインの客車だけがホームに停車し、機関車は離れた所で整備中。この時間がかかり長い。砂箱に砂をみだし、釜の点検をする。私たち旅行者があたりをウロウロ、写真をとつ



シッキムの登山列車、トイトレイン

に時がタイムスリップする。やがて整備されたビューポイントで小休止。沢山の望遠鏡が並ぶ。有料？でも硬貨なし。農家の庭先をかすめると、にわとりがのどかに餌をついばんでいる。そのとき機関手はコケコッコのリズムで汽笛を鳴らしてくれた。なんと洒落れたサービスだろう。素敵なセンスの機関手に脱帽。かくして私たちは二〇一〇年一月十二日、ヒマラヤ山麓に至福の一時を過ぎたのだった。列車はグーム駅に到着。駅にはヒマラヤ鉄道資料館がある。

*

◇カンチェンジュンガ インド・ネパール国境にそびえる世界第三位の高峰。標高八五九八m。

◇一八八一年ヒマラヤ鉄道開通。機関車は小さく可愛らしくトイトレインの愛称で呼ばれる。世界最古の登山鉄道として一九九九年世界遺産に登録された。

俳句

幸枝

○ 信州の蔵の町なる雪見酒

○ 蕨の薑カラツと揚げて旅の宿

○ 七草の白味噌仕立て匂い立つ

○ 一字づつおだやかに晴れ試筆かな

○ 舍利塔のごとく重ねし鏡餅

たり、機関車の一部にのぼつたり、大いに邪魔だつたろうと思うが、ひと言の文句も言わず黙々と仕事を続けている。やがておもむろに客車と連絡、いざ出発！当日は客車三両、狭軌の中は六十一センチである。客席はシートの具合もよくまずまず。町の中を家々の軒先をかすめて走る。老婆が上りがまちに坐つて列車を眺めている。家の中の様子までよく見える。登り道になるに及んで、ガツタンゴットンと列車は喘ぎ始める。栄養のよい肥つたおばさんとしてはまことに申し訳ない気分。

幼い時、父の転勤で山形に引越すことになり、板屋峠で列車が喘ぎ止った所、父が残雪を掬いに降りて食べさせてくれたことをふと思い出した。？年前

「手紙」

ある日の家族会の懇談で、こんなことを言う人がいた。

「『手紙』と言う歌を聞いたんですが、涙が出ました。もつと前に聞いていれば、死んだ主人に優しくしてあげられたのに」

そこで早速、レコード店に行つてCDを買い求めた。その歌はブラジル人の母が我が子に当てた手紙を歌詞にしたもので『親愛なる子供たちへ』という副題が付いていた。

翻訳して樋口一がギターだけで曲を付けた語り調の歌だ。大要、こんな内容である。

♪年老いた、私がある日、今までの私と違っていたとしても、どうか、そのままの私のことを理解してほしい
♪私が服の上に食べ物をこぼしても、靴紐を結び忘れても、私があなたに色



んなことを教えたように、見守ってほしい

♪あなたと話す時、同じ話を何度も何度も繰り返しても、その結末をどうか遮らずに、鎮めてほしい

♪楽しいひとときに、私が思わず下着を濡らしてしまったり、お風呂に入るとの嫌がる時には思い出してほしい。

あなた追い回して何度も着替えさせたり、嫌がるあなたとお風呂に入った懐かしい日のことを。

♪悲しいことではないんだ。消え去って行くように、見える私の心へと励ましの眼差しを向けてほしい

♪悲しいことではないんだ。旅立ちの前の準備をしている私に、祝福の祈りを捧げてほしい

♪よろめく私を支える心だけを持っていてほしい。きつとそれだけで、私には勇気が湧いて来るのです。

♪あなたの人生の始まりに私がしっかり付き添ったように、私の人生の終わりに、少しだけ付き添ってほしい

聞き終わってみると確かに胸にグツと来るものがある。

「何遍ゆうたら分かんのだ！」

年老いた母に声を荒げたことを思い出した。『手紙』を聞く度に母にもっと優しくしてあげれば良かった、と心がキリキリと痛む。(龍)

「インド旅行」 短歌二十首 友佳子

○ 取り入れの澄みたる棚田写しつ 命輝やく時を想いぬ

○ シッキムで自動小銃持つ兵士目つき 敵しく我等を通す

○ シッキムは斜面に住まう土地なり 朱鮮やかに僧院も立てり

○ 再びは来る事なけむシッキムで若き僧等は修行に励む

○ 朝焼けに染まるカンチェンジュンガ 見むと出ず空を寂かに覆う雲海

○ 冬空を寂かに覆ふ雲の間に月の在処(ありど)は淡きくれない

○ 眼下には川2ツ寄り合いて流るダージリンへ越え行く峠

○ 又の日の有りと思わず巡り行くデコポコカーブ急勾配の道

○ たどり着きしダージリンには人多く家に添い歩く犬も多かり

○ ダージリンのホテルに咲いた桜草 淡々として心落ちつく

○ 冷えしるく入れてもらいし湯タンポと友等の気遣い胸に満ちいて

○ 線路巾七〇足らずのトイ・トレイン古き家並ゆつくり進む

○ 図らずも蒸気機関車のトイ・トレインに近寄り写し友等と乗車

○ 車降りたちまち石段の道となる動物園は山の上なり

○ 海拔高く人の往来乏し路地に商う菓子袋膨らむ

○ クレーンもユンボも無くて補修するスコップ吊り上ぐ女工夫

○ 誕生日迎えし友を囲み歌うワイン ダメアホテル一月の宵

○ バグドグラへ向う車窓に清々しく刈られし茶園に日射しやわらか

○ ダージリンで値下げのゲームコルカタで大買いをする二重人格

○ 身ゆるもの我が営みと違うなど考え迷う事等あらず



「五大宝蔵」という意をもつカンチェンジュンガの五山(右)と怪峰ジャヌー(左端)

さらっと生きたい

家から近くの公園を、犬の散歩によく利用している。「愛犬のフンは飼い主が持ち帰ってください」という貼り紙が、あちこちに貼布してある。当然でしようと思いいきかせながら通り過ぎてゆく。でも心にひっかかる。

公園をひと回りする際、車いすの人をよく見かける。時には車いすの側へよって話しかけている人、肩こしに話しかけてもらっている人。

胸をつかれるのは、乗せられた人の多くが無表情なのである。「にっこり」というのはない。

陽がそそぎ、四季の花がつぼみをふくらませているのに、でもその顔を見るとどことはなしに苛立ちを感じているようでもある。自分もあの境遇になれば、もっときつい表情になっただろうと思う。

若い人と同じリズムといかなくてもいい。ゆるんだ桶のタガを、たまにはしっかりと閉めること。脱線しないように。つまりぬ事にせんとさわやかに生きるんや。

自分はダメだと思わない

今度は愛妻家。いい映画だった。愛しくて切ない。ふたりで見たかった。

た。

長年連れ添った夫婦こそ、おたがいの想いを言葉にして伝えることが先ず第一。

仏壇の前で手を合わせ、主人に感謝の気持ちをのべ、まさかこう来るとは……

全てがわかった時、涙が止まらず陽水さんの曲。「赤い目のクラウン」心を打ちならし、口ずさんでしまっただ。

豊川悦司。むつり型、そして鷹揚、そして人一倍心温かい。そして誰かに似ている。

葉丸丸ひろ子。どんな場合でも「自分なんかダメだ」と思わなかったこと。良いときも、悪いときも同じように自分を受け入れたこと。

落ち込んだら自分で「よいしょ」ともち上げること。考え方を変えることで、見方が変わり気分も行動も変わってくることを教えられた。映画を見て。

立松和平さんの死

立松和平さんの死

家の光愛読者として、いつも立松和平さんの「都市と農村のつながる境界で」泥んこで大根を抜き田植えをし雑穀を共にして、にっこり笑って「泥の中にしか美しいハスの花は咲かないんです」。この記事を読ん

でいた。

立松さんの死。まだ早いじゃない六十二歳なんて、ああ、家の光の頁をくる気がおきなくなってきた。

立松さんは旅の人、農村をよく取材し掘り起こし、そこに生きる人達を鮮烈に描かれ、もつともつと掘り起こして都市化する農村、農業を捨てようとする若者たちに声をかけて欲しかった。

故郷に足に向けて驚くことは、若者不在、老人達がほほかむりをして土にしがみついている姿。この大きな田園地帯はどうなるのか、と心が痛んでいた時、立松さんの計報はシヨックが大きい。



編集後記

今回からペンネーム「敷島旭」さんの連載が始まります。彼は個性派の経営コンサルタントです。面白い視点からの文に期待して下さい。

インドのシッキムに旅行された皆さんからの投稿が多く、一度も行った事がない私ですが、秘境を訪ねている気分になりました。

投稿いただいた方々にはお礼を申し上げます。

愛読者である方が来店され、一号から読みたいからという申し出がありました。その方は、近所の方と話し読みをされているそうで皆さんとても楽しみにされているそうです。

この小誌が少しでも皆さんの役に立っているなら、編集者として大変うれいす。(喜)



芥川商店街歳時記

春の大売出し

お買物ラリー・金券プレゼント

3月26日～4月4日

☆☆☆

夏物お仕立てセール

着物地の絹、紗、麻から涼しい洋服を仕立てます

3月15・16・17日

☆☆☆

着物から服を仕立てます

荒～ほん～